A 機能時ニ於ケル力線

B 平衡咬合(組織壓縮ノ結果ヲ示ス)

デハナイ。(d)顎堤上ノ義齒底ノ移動ハ機能ニ從ツテ正確ニ記録サレル、何トナレバ咬頭ノ高サ及ビ咬頭ノ傾斜面等ニヨリ同ジ原因的力ハ含マレテキルカラテアル、位置的記録ハ垂直ノ力ヲ決定サレル。歯牙が適當ナ位置ニアル時ハ側方ノ力ハ齒牙ノ斜面ニ對シテ等シク垂直ノ力ニヨツテ牀ニ向ケラレル。圖Aハ齒牙が機能シ記録器が其ノ記録ヲシテキル時ノ力ノ線ヲ示ス。(e)圖Bハ食物ノ塊ガ作用側ニ挿入サレタ時平衡接觸ガ維持サレル様ニ平衡咬合ハ顎堤及ビ顎狀突起高内ノ組織ノ壓力ノ限界内ニ於テ正確ニ合ツテキルコトヲ示ス。(森本賢市)

負荷及除荷ノ立場ヨリ見タル近代義齒療法

Neuzeitliche Prothetische Therapie vom Standpunkt der Belastung
und Entlastung betrachtet

von Dr. Willy Geier. Stuttgart-Degerloch.

(Korres. f. Z. Nr. 5, 6, 7, 1933)

近代義齒療法ノ興味ノ中心ハ局部義齒ノ問題ニシテ種々ノ雑誌書籍ノ中ニコノ問題が取り扱ハレテ居ル。先ヅ從來ノ齒牙補綴術 (Zahnersatzkunde) ト云フ名稱ハ齒科補綴術 (Zahnärztliche Prothetik) ト改稱スルノガ正シイ。ソレハ殘存齒或ハ顎ニ生物學的ニ組合ハセルト云フ意味ヲ含ンテ居ルカラデアル。ソレデ生物學的狀態ニ最モ近イ義齒ヲ作ラナケレバナラス。一ツノ缺如齒列ガアル場合ニ固定架橋ヲナスカ可撤架工ヲナスカハイツモ議論ノ中心ニ立ツモノデアルガ後者ハ患者カラソノ低價値ヲ訴ヘラレル爲ニ臨牀家ハ可及的固定架橋ヲナス。併シ遊離端義齒 (Freiendersatz) ニ關スル限リハ架橋齒構成ハ禁忌デアル。設計:-吾々ノ臨牀上設計ノ手引トシラ用フ可キモノニ Kennedy ノ分類ガアル。勿論嚴密ナモノデハナイ。例ヘバ Schalow 氏ハ文獻上デハ用フ可キモノデアルガ實際ニハ無價値ナモノトシテ忌避シテ居ル。級 I-兩側ノ臼齒及小白齒ガ缺如シ前齒ノ殘存セルモノテ鉤ハ義齒ノ前ニアルノガ特徴デアル。II 級-片側ノ臼齒, 小白齒ノ缺如セルモノテ無齒顎ガ大キナレバナル程普通ノ鉤著デハ危險ニナル。III 級-前後殘存齒間ノ間隙ヲ原則トシテハ固定架橋ガ行ハレルガ特ニ遠心ノ支臺齒ガ弱カツタリ病的支持組織ノ場合ニハ架橋ヲナスカ可撤義齒ヲナスカハ大イニ顧慮ス可キデアル。IV 級-無齒顎ガ鉤線ノ前ニアル場合デ主ニ前齒ノ缺如デアル。小部分ノ缺如ハ固定架橋ヲ以テ, 小白齒マデ缺如セル様ナ場合ハ可撤義齒ヲ以テ補綴スル。前齒四本ノ缺如ニハ I, II 小白齒ヲ支臺齒ニ加ヘテ廻狀固定ヲシテモ尙挺子作用ニヨル弛緩ハ充分ニ防ゲナイ。結局, Kennedy ノ分類ノ教ヘル最モ重要ナコトハ I, II 級ノ遊離端義齒ニ於テ決シテ強固ナ鉤著ヲシテハナラナイト云フコトデアル。尙 Haus 氏ノ經テハ拔齒後直グニハ護謨牀義齒ヲ作り 4 乃至 7 年裝著サセ骨ノ吸收ガ心配ナクナツタ後金牀義齒ヲ作ル可キダト述ベテ居ル。又粘膜層ガ薄ク緊張セル場合ニハ金屬義齒ノ調製ヲ中止シテ護謨牀義齒ヲツクル。ソレニ依リ粘膜ハ強ク厚クナル利點ガアル。鉤著:-コレハ除荷義齒ヲツクルカ負荷義齒ヲツクルカラ決定スルモノテ吾々ノ實際ニ於ケル中心デアル。除荷義齒トハ義齒牀從ツテ齒槽突起ニ咀嚼壓ガ加ハルモノデアリ, 負荷義齒トハ支臺齒ニミ咀嚼壓ガ加ハリ齒槽突起ニハ加ハラナイモノヲ指ス。負荷義齒ハ遠心支臺齒ガ充分力強い場合ニ選バル可キモノデ Kennedy ノ I, II 級ニハ牽引作用ガ遠心支臺齒ニ生ズル爲ニ不都合デアル。一般ニ支臺齒ニ負荷シ齒槽突起ノ除荷ヲ主張スル補綴家モアル。即齒槽骨ノ吸收ヲ氣遣フ爲デアル。除荷說ヲ取ル可キカ負荷說ヲ取ル可キカハ局部補綴ノ核心デ今日尙明瞭デハナイガ著者ハ殘存齒ニ除荷シテソノ早期脱落ヲ防グ可ク主張シテ居ル。Gottlieb, Loos モ亦除荷說ヲ支持シテ居ル。齒槽突起ニ負荷スル爲ニハ次ノ印象ノ問題が大ナル役目ヲナス。印象:- Kennedy ト米國ノアル一派ノ臨牀家ニ依ツテ暫ク前カラ用ヒラレタ「Kerrmasse」ハ軟組織ノ壓迫ヲ得ルニ石膏ヨリモ良イト云ハレテ居ル。併シ齒齦縁ノ除荷ガ大切デアル爲ニソノ部ニ壓ヲ加ヘナイ様ニスルコトガ肝要デアル。尙連合印象 (口蓋, 齒槽突起ハ Kerrmasse デ殘存齒ノ脣頰側ハ石膏ヲ以テ採ル印象) モ推賞サレ殊ニ「Skelettierte Prothesen (有骨義齒)」製作ニハ適ス。而シテ作業模型ハ特種石膏, 著者ハ「Moldanogips 1. G. Farben」或ハ「Modelitgips der Firma Böhme, Hohenbocka」ヲ用ヒテ居ル。

咬合:-病的咬合ヲソノ儘探ツテ義齒ヲ作ツテハナラス。卽下顎ヲ總テノ方向ニ動カシ得ナイ不正咬合ガ存スルナラバ「Paradentose」ヲ起スノデアルカラ義齒ニ於テ惡イ咬交關係ガアレバ機能低下ノミナラズ殘存齒ニ重イ障礙ヲ起シ得ルコトハ明カデアル。故ニ不正咬交ハ可及的咬交平衡ヲ得ル様ニ直シテ後義齒ヲ作ルコトが必要デアル。鉤:-鉤ハ可撤義齒ヲ保留スルコトガ非常ニ大切デアル爲ニ實際ニハソノ價値ガ過大視サレテ強固ニ齒牙ヲ掴ムコトノミガ留意サレ鉤齒ニ如何ナル狀態ヲナスカハ附帶的ニ考ヘラレテ居ル。ソコデ鉤技術ニ色々改革ガ行ハレタ後一旦影ヲ潛メタ彈力性線鉤ガ今日用ヒラ板鉤ガ少クナツタ。Kennedy 氏ニ依ルト充分彈力性アル線鉤ハ不必要ニ齒牙ニ接觸スルコトナキニモ拘ラズ良キ保持ヲ得ルト云フ。往々遊離端義齒ニ於テ大ナル缺點ヲナスハ鑄造鉤デアル。鉤技術ニ大ナル功績ヲ與ヘタ Roach ハ近年點狀ニ齒牙ト接スル鉤型ニ移行シテ居ル。米國ノ製品デアル連續鉤ハソノ原理ハ天才的熟慮のデアルガ非常ニ精巧ニ作ラナケレバ無効ニ終ルモノデアル。Rosenzweig 氏ハコノモノハ矯正裝置ノ作用ヲナスモノデアルト主張シテ居ル。著者ハ遠心支臺齒ノ隣接面マテ鑄造シテ脣側鉤腕ハ線鉤ヲ鑲著シ、後程義齒牀ノ沈下ガ起キタ場合ニハ線ノ彈力型ヲ加減スルト述ベテ居ル。連續鉤ヲ用ヒル場合ニハ咬合面止(「Okklusale Auflagen」)ハ支臺齒ノ過重ヲ來タス爲ニ斷念シナケレバナラス。尙「Kippmeider」副木トシテノ作用ヲナス。最近ノ傾向ハ殘存齒ノ周圍ノ刺戟ヲ少クスル爲ソノ部ヲ空ケテ置クニ止ラズ益々本來ノ足場ダケヲ殘ス程度ニ牀ヲ小サクスル様ニ移行シテ來タ。ソノ爲有骨義齒、鋼桿義齒(「Stahlbügelprothese」)ガ廣ク用ヒラレツ、アル。著者ガ敢テ「アタッチメント」ヲ論ジナイノハ吾々ノ囑セル希望ヲ滿タサナイカラデアル。材料:-可撤義齒ノ材料ニハ今日尙金ガ第一位デアル。「Wipla」ハ確カニ最近補綴術ニ於テ大ナル進歩デアルガ唯代用品トシテ役立ツニ過ギヌ。コノモノハ鑲著ガ不可能テ熔接シナケレバナラス。鋼鐵ハ熔接スルトソノ部ハ抵抗減弱トナル。(大搦義雄)

二重帶環繼續齒

Die Doppelring(Stift-)Krone von Dr. Alexander Fränkel.

(Zeitschrift für Stomatologie 32 Jahrg. 4. September 1934 Heft 17)

一世紀以來殘存シテ居ル齒根ニ對シテ人工的補綴ガ行ハレテ來タ。1878年 Richmond ガ Stiftト根ニ對シテ Ring(Umklammerung)ヲ考案スルニ及ンデ所謂 Stiftkrone ノ確タル根據ガ持テル様ニナツタ。併シ乍ラ Ringstiftzahn ハ異常ナル外力ニ對シテ強靱ト言ハレナイ。即チ現在 Stiftzahn ニ最モ必要ナコトハ維持裝置ノ強化デアル。コノ爲ニ私ハ内環ヲ作ツタ。コノ裝置ハ Stiftzahn ヲシテ全ク強靱ナラシメルモノト確信スルモノデアル。コノ内環ハ根管ニ適應シタ不
等四邊形(梯形)ノ金屬薄板ヨリナリ根管ノ内側ニ密著スル環デアツテ 根管壁ニ密著スル爲ニ環ノ上半部ニ刻ミ目ヲ入レタモノデアル。私ハコレヲ Doppelringstift-Krone 二重帶環繼續齒ト名付ケルモノデアル。コノ Doppelringstift-Krone ノ主ナルモノハ内環デアツテ外力ニ對スル強靱ナル抵抗力ヲ有スル。Stift ノ作用ハ微々タルモノデアル。コノ Doppelringstift-Krone ノ強靱サ